

あなたの脚 大丈夫ですか

vol.8

番外編〜末梢動脈疾患

動脈硬化が進行した「全身病」

末梢動脈疾患は、脚の血管に動脈硬化が起こり、狭くなったり詰まったりして血液の流れが悪くなり、脚にさまざまな症状を引き起こす病気です。以前は、「閉塞性動脈硬化症」あるいは「下肢慢性動脈閉塞症」と呼ばれていました。これらの名称の方が、馴染みがあるかも知れません。

末梢動脈疾患は、気づかない間に徐々に進行します。初期の段階では、下腿部や足趾の冷え（冷感）や軽いしびれを感じ始めますが、ほとんどの場合、「たいていしたことはない」「どうこうで放置していいから」と進捗するや、くらくら歩くと脚（多くはふくらはぎ）にだるさや鈍い痛みを感じますが、しばらく休むと症状が治まるので、なかなか異常に気づくことは難しいといわれています。この状態を「間欠性跛行（はこぎ）」といいます。それでも放置していると、じっとしていても痛みが出たり、皮膚潰瘍や壊死を生じ重症化してから末梢動脈疾患と診断されることも珍しくありません。

脚の冷えや痛みを「年のせい」「とあきらめて放置している」こともあります。腰部脊柱

管狭窄症や座骨神経痛でも「間欠性跛行」が現れることがあります。また、股関節・膝関節などの関節疾患でも脚の痛みを生じます。そのようなこともあって、まず整形外科を受診することがあります。

どのような人がかかりやすいのでしょうか。それは男性、中年以降（50歳以上）、そして喫煙者です。動脈硬化を進行させる高血圧症、脂質異常症（コレステロールが高い）、糖尿病、運動不足、肥満など、いわゆるメタボリック症候群の方は特に注意が必要です。

まずは症状の起こり方をチェックすることから始めましょう。「普通の人と一緒にどこまでも歩けますか」「どこがつかいにくいのですか」「その痛みはどのように消えるのですか」などがチェックの仕方です。



察します。そして、脚の付け根から足の甲までの脈拍の強弱を触診で確かめます。

専門的な検査としては、ドプラ血流計や脈波計などで脚の血流を測定します（写真）。特に、足首と上腕の血圧を同時に測定して、その血圧の比を取ることで、動脈のつまり具合の判定を行います。血管年齢の推定もできます。そして、超音波検査で腹部大動脈から足先の動脈壁の性状（厚さ、石灰化など）、狭くなったり閉塞したりしていないかなど、詳細に観察していきます。最終的には、造影CT検査などで治療方針の決定を行います。

末梢動脈疾患は、脚の血管だけに限定した病気ではなく、あらゆる血管に動脈硬化が進行した「全身病」と捉えておくことが重要です。脳血管障害（脳梗塞）や虚血性心疾患（心筋梗塞）を発症し、生命の危機に陥る可能性があると考えておかなければなりません。

脚（足）が冷たい、しびれる、歩くときふくらはぎが痛くなるなど、末梢動脈疾患が疑われる場合には、血管外科を専門とする医療機関を受診することを勧めます。

1986年愛媛大学医学部卒。岡山大学第二外科、屋島総合病院外科を経て2007年に医療法人社団仁和会社クリニック（高松市林町）開設。下肢静脈瘤日帰り治療、末梢動脈疾患など血管外科を中心に診療。医学博士。外科専門医、循環器専門医。

辻クリニック院長 辻 和宏